

カザフスタンにおける日常的腐敗 -- フィールドワークに基づく考察 (分析レポート)

著者	岡 奈津子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	37-42
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045709

カザフスタンにおける日常的腐敗 — フィールドワークに基づく考察 —

岡 奈津子

男が警察に就職した。しばらくして職場から「どうして給料を受け取りに来ないんだ」といわれてびっくり。「制服と拳銃だけじゃなくて、給料までもらえるなんて！」

これは筆者が調査のため滞在したカザフスタンで、何度か聞かされた小話である。そのココロは、警官は袖の下でしっかりと稼いでいるので、安月給のことなど忘れている、というわけだ。

このようなジョークが人口に膾炙する社会において、人々はどのような日常生活を送っているのだろうか。本稿では、カザフスタン市民の生活に深く浸透している贈収賄について、その一端を紹介するとともに、市場経済化という経済システムの転換を経て、ソ連時代の「コネ社会」がどのように変

化したのかを考えてみたい。

●生活の一部としての腐敗

二〇一一年の五月から十二月まで、筆者はカザフスタン東南部に位置するアルマトゥ市で腐敗に関する調査を行った。主な調査方法は個別インタビューで、一般人々と、腐敗について詳しい情報や見解を持つ専門家に話を聞いた。帰国後の現地調査も含めると、聞き取りに協力してくれた人の数は六〇名で、年齢、性別、職業、民族も様々である。若干の例外を除いて面談相手のほとんどが賄賂やコネを利用した経験があり、かつ身近なところでさまざまな事例を見聞きしていた。

無論いつの時代も、どんな社会にも腐敗はある。だが現在の日本において、一般人の大多数は贈収

賄には無縁だろうし、役人や教師からあからさまに金銭を要求されたこともないだろう。コネ入社は珍しくはないかもしれないが、あくまで例外だ。しかしカザフスタンでは、程度や頻度の違いはあれ、袖の下を使ったり、親戚や知人の口利きに頼ったりするのは、ごくあたりまえの、ありふれた行為である。どういふときに誰にいくら、あるいは何を渡せばいいのかは、皆なんとなく知っているし、知らなくても必要が生じたときには、人づてに聞けばたいいわかる。

金やコネに頼った解決方法は、多くの人が熟知し日々採用している、いわば第二の社会規範なのだ。なぜ人々は公式なルールには従わず、非公式に物事を解決しようとするのか。この問いに対するもつとも一般的な答えは、そうせ

ざるをえない状況に置かれているからだ。手続きが煩雑すぎて膨大な手間がかかり費用もかさむため、賄賂を払った方が時間もお金も節約になるし、なによりいらしなないで済む。あるいは子供が通う学校の校長や学級担任から、校舎の改修のための費用が必要だといわれたら断りにくい。自分や家族が救急車で病院に運ばれ一刻を争うとき、診てほしいければ金を払えと医者に要求されたら、できる人はなんとかしてそれを工面しようとするだろう。

他方、本来なら金銭では手に入らないもの—学校の成績や卒業資格、大学入学試験の点数、博士号、学業や仕事を休むための疾病証明書、運転免許証、公務員の役職、民間企業の管理職ポスト、服役を避けるための執行猶予等々—を人々が「買う」ケースもある。お金さえ払えば面倒な手続きに悩まされることもなく、本人の努力や能力に関係なく試験に合格したり就職でき、兵役義務を回避したり、犯罪すらもみ消すことができる社会は、ある意味「便利」であるといえなくもない。カザフスタンの人々は蔓延する腐敗に悩まされる被害者であると同時に、腐敗した

システムを利用する受益者でもあるのだ。

●「腐敗」とは

ここで「腐敗」という用語について一言、断っておく必要がある。現地でのインタビュの際、筆者はロシア語で「コルプツィヤ(Korruptsia)」について尋ねた⁽³⁾。これは英語の「コラプション(corruption)」に相当し、日本語では「腐敗」ないしは「汚職」と訳すことができる。広辞苑(第六版)によれば、「腐敗」は「精神が墮落して、弊害が生じる状態になること」、「汚職」は「職権や地位を濫用して、賄賂を取るなどの不正な行為をすること。職をけがすこと」とあり、日本語訳としては「汚職」のほうがわかりやすいかもしれない。しかしここでは、より広い概念である「腐敗」を使うことにしたい。なぜなら、カザフスタンの人々が「コルプツィヤ」について語ってくれた事例は実に多様で、贈賄や職権濫用を中心としつつも、それらには必ずしも当てはまらないものも存在するからだ。

では「腐敗(コラプション)」とは何か。もっともシンプルかつ

広く使われている定義に、世界銀行や国際NGOトランススペアレンシー・インターナショナルによる「私的利益のための公職濫用」がある(この和訳としては「汚職」がぴったりくる)。しかし、腐敗研究の分野では腐敗の定義をめぐって様々な議論がなされており、一致した結論には至っていない。前述した世銀の定義は近年、主に人類学や社会学の立場から、制度的、文化的、歴史的要因が複雑に絡み合った腐敗現象を理解するには狭すぎるのではないか、という批判もなされている。

筆者は、あらかじめ腐敗とは何かを定義し、それを前提に調査を行うのではなく、「コルプツィヤ」についての人々の語りを集めることに努めた。自分が事前に用意した定義にあてはまる事例だけを語ってもらったり、あるいはインタビュによって得られたデータから、どれが腐敗でどれがそうではないのかを選別することは、あまり生産的ではないと考えたから

である。それよりも重要なのは、カザフスタンの人々自身が何を腐敗と考え(あるいは考えず)、それをどう評価しているのかを知ることだ。

●「非公式なサービス」の浸透

「腐敗」と一口にいつても政治家、高級官僚、末端の役人や診療所の医師まで、関与する人や組織、やりとりされるモノや金額もさまざまである。筆者はスキヤンダラスな疑獄事件ではなく、一般の

人々が日常生活や仕事のうえでどのような腐敗体験をしているのか、そして彼ら自身がそれをどう評価しているのかに注目している。

ここで興味深いデータを紹介しよう(表1)。これはカザフスタンの調査機関が、過去一年半の間に公的機関と関わりを持った個人・法人を対象に、「非公式なサービス」(贈賄や口利きにより、公的機関で不正に便宜を図ってもらうこと)について尋ねたアンケート

表1 国家機関の腐敗度(非公式なサービスの提供)

順位	国家機関	%	違反内容
1	道路警察	55	交通規則違反黙認、運転免許証交付、自動車登録、車検合格
2	税関	46	通関手続の緩和、違法貨物持込黙認
3	衛生・伝染病局	41	良好な検査結果、証明書交付
4	国立大学	40	国費(無料)枠提供、科目試験合格、専攻変更
5	保育園	40	入園、時間外保育
6	建築	39	建築や増改築の認可、証明書交付
7	土地登録	37	土地の登記、私有化、証明書交付
8	刑事施設	36	受刑者の仮釈放、恩赦、刑罰の軽減、面会や荷物受取の許可
9	財務警察	35	取賄などの違反の黙認
10	国境警備	33	出入国違反黙認
11	移民警察	32	住民登録、労働許可
12	裁判所	31	有利な判決
13	鉄道輸送	31	特定の日時の切符の手配、切符なしの乗車、車両や側線の貸切
14	徴兵司令部	31	軍人手帳交付、徴兵猶予、兵役不相当の医師診断書、軍人の階級称、特定の部隊や都市における従軍、入隊許可
15	不動産登録	30	不動産登記、証明書交付
16	警察	29	刑事事件のもみ消し
17	教育行政	27	保育園入園、全国統一試験(大学入試)の点数、後見人手続
18	消防	26	防火証明書類交付、火災や違反に対する罰金の軽減
19	法務	25	各種書類手続き、会社登記、認可、文書認証、刑事事件に関する口利き
20	税務調査	25	違反の黙認
21	検察	23	国家機関に対する不服申し立て、裁判所への口利き、刑期変更、ビジネスの庇護、競争相手の排除
22	環境局	22	密猟、密漁、不法伐採の黙認、罰金の免除、企業活動等の許可
23	国立病院	22	手術の際の謝礼、各種検査費用や薬代の自己負担、証明書、診断書発行
24	通信	22	電話回線設置、回線修理
25	地方行政府	21	特典住宅および土地の入手、公的支援により建設された住宅への優先的入居、墓地の入手、起業
26	旅券課	20	身元証明書、居住登録証交付
27	学校	19	特定の学校への入学、卒業証書の成績

(出所) 参考文献①。
 (注) 1) 第28~34位は省略。「違反内容」にある説明は若干補足ないしは割愛した。とくに「財務警察」の欄は引用した表では空欄になっている。「不動産」と「土地」は内容が重複するがそのまま記載した。
 2) ここに挙げられている数字(%)は、各機関の利用者(160~170人・企業)を母数とし、そのうちどれだけの人が非公式なサービスを受けたかを示している。

トの結果である。カザフスタン全土（首都アスタナ、前首都アルマトウ、一四州の州都）で実施され、サンプル数は五七六〇（うち一七％が法人）。実施時期が明記されていないが、出版年から判断して二〇〇六年か二〇〇七年であろう。

この調査結果からわかるように、カザフスタンでは非公式に問題を解決することは決して例外的ではない。ましてや賄賂やコネの利用はデリケートな問題だ。実際にそのような手段に訴えていても、人に聞かれたら否定することもあるだろう。そのような過少申告の可能性を考慮すると、公的機関における腐敗の実態はこれよりさらに深刻な可能性がある。

ここであげられている「違反内容」は若干の説明が必要であろう。まず、教育や保育（国立大学〈第四位〉、保育園〈第五位〉、教育行政〈第一七位〉、学校〈第二七位〉）は、子供を持つ家庭の多くが直面する問題である。日本同様、カザフスタンでも公立保育園の枠が不足しており、入園を申し込んで何年も待たされることも少なくない。それが原因で、子供を保育園に入れるために、行政の担当者や

保育園の園長に袖の下を使うことがしばしば行われている。

カザフスタンの国立大学の学費は有料で、有名大学ほど高い傾向にある。学部によっても授業料は異なるが、アルマトウでは年間二〇〇〇ドルから一万ドルともいわれ、一般家庭にとっては非常に負担が大きい。ただし全国統一試験（ENT）の成績がよければ政府の奨学金を受け取ることができ、事実上学費は免除される。表1に「全国統一試験の点数」とあるのはそのためだ。また大学院生を対象とするものなど、各大学の裁量で決められる奨学金もある。

病院（第二三位）も生活と密着する機関だ。国立の病院や診療所は原則無料だが、検査代や薬代はしばしば自己負担を求められる。手術の前に公然と金銭を要求する医師も珍しくないが、とくに出産などでは患者が自ら謝礼を渡すことも多いようだ。

兵士の徴集を行う徴兵司令部（voenkomat, 第三一位）でもコネや賄賂がものをいう。軍の待遇や新兵いじめを心配する親は、なんとかして息子の徴兵を逃れさせようと画策する。しかし失業がより深刻な農村部ではこれとは反対

に、賄賂を払って（その金額は徴兵逃れよりずっと少ないが）息子を入隊させる親もいる。「軍人手帳」（voennyi bilet）は兵役経験者に交付されるが、最近では公的機関への就職に手帳の提示が義務づけられているため、違法にこれを手入れしようとする若者もいる。

人々はなぜ非公式な解決方法を選ぶのか。これには様々な理由や背景があるが、大別すれば①ゆすり②違反の黙認・幫助③サービスの向上、をあげることができよう。①は、道路警察が賄賂目的で、交通違反をしたといいがかりを付けたり、車に不備があると難癖をつけてわざと車検を不合格にする、といったケースがこれにあたる。

②は、試験の点数をかき上げしてもらったり、犯罪行為をもみ消さないものを入手したり、処罰を逃れるケースである。同じ贈賄行為でも、①では賄賂を要求される市民は腐敗の犠牲者であるのに対し、②と③の場合は、贈賄側もそれによってなんらかの利益を得ており、場合によってはむしろ腐敗を積極的に利用しているといえるかもしれない。

ただし実際には、これらの境界

線はあいまいである。前述した道路警察の例で考えてみよう。運転者がスピードを出しすぎたなら、贈賄の理由は警察のゆすり（①）ではなく違反の黙認（②）だが、袖の下を求められた側に落ち度があるのか否かが明確ではない場合もある。交通違反についていえば、警察の恣意的な取り締まりに対して、ドライバーが身の潔白を証明することは難しい。もちろん公式な罰金を払うという方法もあるが、賄賂よりも高くつき、かつ時間と手間がかかることから、それを選択する人は少数派である。

これに対して③は、受けるサービスそのものは違法ではないが、賄賂によってよりよい待遇を期待するケースである。国立病院の医者への心づけがわかりやすい例だろう。お金を渡して各種手続きを早めてもらうこともしばしば行われている。通常、窓口には長い行列ができており、何度も足を運ぶことになったり、たらい回しにされたりする。こうした不便さを回避するため、しばしば賄賂が使われるのである。なお一般の人々のあいだでは、賄賂目当てで故意に手続きを煩雑にしているのだ、と

いう見方も根強い。別料金を設定するなど、迅速なサービスを合法的に受けられるようにすべきだと意見もある。

●腐敗の制度化

腐敗の蔓延は、単に役人や警官、医師や教師の私利私欲が原因ではない。腐敗が制度化され、それを再生産する構造ができあがっている組織においては、個々の構成員がシステムに抗うことはむしろ困難である。

カザフスタンの公的機関では、金銭を払って職に就くことがしばしば行われている⁽²⁾。一般に、その金額は月給数カ月分にも相当するため、職を手にしたら自ら賄賂をとって「初期投資」を回収しようという心理が働く。彼（女）は賄賂の一部を上司に渡すが、上司は自分の分け前を取って残りをさらに上の幹部に上納する。このようなピラミッド型のシステムによって腐敗は組織的に再生産されるのである。

具体例として、元税関職員ヌラン（仮名）の話を紹介しよう。ヌランは二〇〇〇年代半ば、税関職員である岳父を通じて四〇〇〇ドルを払い就職した。ちなみに、

こうした公職買収の事例は公式発表でも確認できる。たとえば二〇一二年二月に収賄で起訴されたS・バイマガンベトフ元税関長は、地方の税関幹部の職提供と引き替えに八万ドルを受け取ったとされる⁽³⁾。

さて、ヌランが勤務していたのは対クルグズスタン（キルギス共和国）国境の税関で、彼によれば、賄賂の相場はカザフスタン国内に持ち込む荷物の評価額の一〇％である。平職員の月給は四万二〇〇〇テンゲ（二〇一二年二月のレートで約二八〇ドル）だが、一回の勤務で平均二〇〇ドルの「副収入」がある（これは以下に述べる「必要経費」を除いた手取り額である）。一昼夜働き二日休む勤務形態なので、「副収入」はひと月おおよそ二〇〇〇ドル、公式給与の七倍だ。なお税関では主任一名、職員八名の計九名でシフトを組んでいるが、主任の取り分は平職員の二倍である。

一つの班は、一回の勤務につき上司に五〇〇ドルを上納する。これは、どれだけ「稼いだ」かとは関係なく一定している。そのほか、地元の検察庁、経済・汚職犯罪撲滅庁（財務警察）、国家保安委員

会の出先機関にも分配するが、ヌランによれば、その金額はその時々によって変わるといふ。

「たとえば国家保安委員会の奴らが来たでしょう。今日はあまり集められなかった、二〇〇ドルでなければどうぞ、というところを受け取る。今度は財務警察が、ガソリンがもうない、といってくるので、二〇〇ドルならあると答えると、いや五〇〇ドルだ、さもないとトラック一台たりとも通さないぞ、と脅してくる。そうしたら五〇〇ドル払うしかない。でないと次の日に彼らが待ち伏せていて、「ヤミ」の荷物を持ち込んだ奴を捕まえてしまうからね。カネの代わりに、レストランでおごったりサウナに招待したりすることもある」

なお収賄が日常的に行われている背景のひとつに、福利厚生の不足や、職員による経費の自己負担がある。食事をするところがないので、ヌランは同僚とお金を出し合ってアパートを借り、コックを雇って、そこを食堂にしていたそうだ。さらに、業務遂行に不可欠なガソリンや、視察に来る役人や議員の接待費まで、職員が自腹で負担していたという。それをが

まんしているのも「副収入」があればこそである。

●「相場」と「ネ

四〇代の男性カナト（仮名）は六年ほど前、知人の誕生日パーティーから帰宅する際、ほろ酔いでハンドルを握り、道路警察に捕まってしまった。何もしなければ行政処分となり、免許停止になってしまう。そこでカナトは知人を通じて裁判官に賄賂を渡し、事なきを得た。

「払ったのは一〇〇〇ドルくらいかな。当時としては高いけれど、いま（二〇一一年）なら普通だ。私の知り合いが誰とどう話を付けたかは知らないよ。知る必要もないしね」。一〇〇〇ドルという数字はどうやって決めたのかと聞くと、カナトは「相場（*рынок*）」だという。その金額はスピード違反、飲酒運転、人身事故など、違反の程度によって異なるが、これについて彼曰く「店で買い物をするのと同じさ。同じ砂糖でも、高級品とそうでないのがあるだろう?」このような「相場」の存在は、前述した上納システムと並んで、贈収賄が恒常的・組織的に行われていることの証左といえる。ただ

し、それはあくまで目安であり、実際の金額は支払う側の経済状況、依頼者、仲介者、受領者それぞれの社会的地位や人間関係など、様々な要因に左右される。

カナトの場合、所用で家を離れていて、事件発生から知人に相談するまでに二週間が経過していた。仲介役の知人からは、裁判所に書類が行く前に自分に電話してくれば、警察内部で処理できてもっと安上がりだったのに、といわれたという。ちなみにその知人は「仲介料」はとっておらず、一〇〇ドルはすべて裁判官の手にわたったそうだ。

もうひとつの例をあげよう。ダニヤル（仮名）は賄賂で徴兵を回避した二〇代男性である。彼はカザフスタン南部の出身で、外国で学士号と修士号を取得して帰国した後、徴兵の呼び出しを受けた。しかしダニヤルは軍隊に入りたくなかったし、母親も心配して、なんとか打つ手はないかと奔走した。

「僕には地元の公務員専門病院で働いているオジがいるんですが、彼がこの件で決定権を持つ人物に話をつけてくれたんです。払ったのは五〇〇ユーロだったか

な。僕の場合、もう徴兵リストに入れられていたので、一番偉い人に接触しなければならなかった。名前は知らないけれど、この人物は、誰を徴兵するかを決める委員会に入っていたんです。

オジのコネがなくてもなんとかなったかもしれないけれど、そうしたら年に二回は頼みに行つて、そのたびに心付けを渡さなければならなかったでしょうね。でも僕は一回で終わりにすることができた。金額も、親戚を通じてでなかったら一〇〇〇ユーロだったかもしれない。それ以外に、渡す側の支払い能力も考慮されます。僕は就職したばかりだったけれど、管理職ならもっと多く要求されていたでしょう」

ダニヤルは結局、軍に行かず済んだだけでなく、前述の軍人手帳を受け取ることができたという。

カナトやダニヤル、そして元税関職員ヌランの例が示しているように、確実に目的を達成するには、権限を持つ人物へのアクセスが鍵となる。この際、重要な役割を果たしているのが仲介者である。いくら贈賄が日常的に行われているといっても、公になれば

罪に問われる行為であることに変わりはなく、知らない人物から直接お金を受け取るのはやはりリスクがある。とくに贈る側のイニシアチブでお金やりとりされる場合、第三者が間に入り、受け取る側の匿名性を保証するのが普通である。また贈賄という行為の性質上、思いどおりの結果が得られなかったり、仲介者が賄賂を横取りした場合でも、彼（女）を法的に訴えることはできないため、仲介者との信頼関係も不可欠だ。

なお、ここであげたケースでは無償で手助けをしているが、仲介者が（たとえ親戚や近しい友人であっても）「仲介料」を取る場合も少なくない。やりとりされるのは必ずしも金銭だけではなく、レストランでの接待、高価な贈り物などの形をとる場合もある。

●ソ連時代はよかった？

「腐敗はこれ以上広まりようがないほど、あらゆる分野にはびこっている」「この国に腐敗がないという状況は想像できない」。これは、私がインタビューしたアルマトウの若者たちの発言である。こうした腐敗の蔓延について、ソ連時代を知っている三〇代以上

の人々に、そのころと比べてどう変わったかと尋ねると、ほぼ異口同音に「ずっとひどくなった」という答えが返ってくる。曰く、当時も腐敗はあったが発覚すれば厳しく処罰されたし、そもそも人々は共産党を恐れていた。口利きのお札にしても、昔はせいぜいシャパンかチョコレート程度だったが、いまはそんなもので満足する人はいない。何をすることも賄賂が必要で、それがむしろ当たり前になっている、と。

ソ連崩壊後に腐敗がひどくなった（と考える）理由として、面談者はしばしば、共産党支配の終焉によってもたらされた混乱と無秩序、社会主義イデオロギーの崩壊、人々のメンタリテイや価値観の変化を指摘するが、なかでも決定的な要因と見なされているのが、一九九〇年代に実施された私有化である。トランスペアレンシー・カザフスタン理事長を務めるV・ヴォロノフ弁護士は、筆者に「ソ連時代の腐敗は私有化の進展とともに悪化した。つまり私有化が腐敗の蔓延を促進したのであって、その逆ではない」と強調した。国家の介入を減らす私有化は、腐敗撲滅に有効な処方箋であると

というのが定説だ。しかし旧ソ連諸国の場合、しばしば私有化のプロセスが不透明で、国有資産の事実上の横領や私物化、買い叩きが横行した。ソ連時代の企業幹部や党・国家エリートなどが、その地位や人脈、インサイダー情報を利用して短期間で莫大な資産を築いた一方で、大多数の人々は私有化の恩恵にあずかることはなく、貧富の差は拡大した(参考文献②)。

しかしブルガリアの政治学者クラステフは、私有化で腐敗が悪化したという人々の主観的認識は必ずしも客観的事実ではないとして、考察すべきなのは腐敗が実際に増えたか否かではなく、なぜ人々が「腐敗が増大した」と認識するに至ったのかであると主張する。そして彼は、旧ソ連・東欧諸国に流布する腐敗悪化言説の背景として、社会主義時代に広く実践され、社会的にも容認されていた「blat」が、あからさまな賄賂に取って代わられたことをあげる(参考文献③)。

物不足が常態化していた社会主義経済の下では、日々の生活を送るうえでコネに頼ることが不可欠であった。それをロシア語の隠語で「blat」と呼ぶ。ロシアの腐敗

研究の第一人者であるレデニョヴァは、blatを「不足するモノやサービスを入手するために、個人的なネットワークや非公式な関係を利用し、公式な手続きを回避すること」と定義している。レデニョヴァによれば、blatは金銭の授受をとまわず、そこでは相互扶助の精神や信頼が重視され、すぐに見返りを求めないこともしばしばであった。そのためblatは利他的な「友情」のレトリックで正当化されていたが、そこで交換される「援助」は国家資産や、公的にそれを受け取る権利を有する人の利益を犠牲にして得られたものであった(参考文献④)。

市場経済が導入され、お金さえあればモノやサービスを自由に入手できるようにになると、blatはその役割を大幅に減じた。とはいえず、コネを使って非公式に問題を解決するという慣習そのものがなくなってしまうわけではない。ただし、そこでの人間関係はよりビジネスライクなものに変化しており、はかつてもらった便宜には金銭を支払うことが当然視され、相互扶助という意識は希薄である。現在のカザフスタンにみられる日常的腐敗の特徴のひとつは、ソ

連時代に発達した互酬的なblatが、市場経済化を経て「現金化」されたことにあるといえる。多くの人は、コネの利用は「援助」だが、金銭の授受は「腐敗」だという意識を持っているようだ。しかし、一九九〇年代以降に生まれ育った若い世代にとっては、金銭による物事の解決はすでに定着した社会規範であり、贈賄への心理的抵抗はより薄れているように見える。筆者は、上の世代が「拜金主義的だ」と批判する若い世代の価値観の形成には、教育分野の腐敗が少なからず影響していると考えている。次回のレポートでは、この点を考察してみたい。

(おか なつこ/アジア経済研究所
中東研究グループ)

《注》
(1)カザフスタンの主要言語はカザフ語とロシア語だが、筆者が調査を行ったアルマトウでは、独立後二〇年を経たいまもロシア語が優勢である。

(2)表1では、複数の国家機関の「違反内容」に当該機関への就職があげられていたが、これは基本的にすべての機関に当てはま

る。煩雑になることを避けたため表では訳出しなかった。

(3)“Finpolitsiia oznakomit eks-glavnu KTK MFPRK s materialami ugolovnogo dela,” www.zakon.kz, 2012/06/19.

《参考文献》

①Turisbekov Z., Zh. Dzhandosova, A. Tagatova and N. Shikbaeva 2007. *Administrativnye bar'ery kak istochnik korruptsionnykh pravonarushenii v sfere gossulzhyb*. Almaty.

②フリーランド、クライステイア「二〇〇五」『世紀の売却：第二のロシア革命の内幕』(角田安正ほか訳)、新評論。

③Krausev, Ivan 2004. *Shifting Obsessions: Three Essays on the Politics of Anticorruption*. Budapest: Central European University Press.

④Ledeneva, Alena V. 1998. *Russia's Economy of Favors: Blat, Networking and Informal Exchange*. Cambridge: Cambridge University Press.